２０２３年８月２０日「安息日の解放」　青戸教会　　高橋克樹牧師
聖書　アモス書５章１８～２４節、ルカ福音書１３章１０～１７節

安息日の規定は、神が天地を創造された際にすべてを完成させた後に、７日目にその創造の業を休まれたことに起因しています。この休息されたことの意味を、後のイスラエルの人々は、６日間は日常の仕事に精を出したとしても、第７日目は天地創造の業を成した神のことを想起して過ごす日として、すべての労働をやめて、ひたすら神のことを想起する日として、厳格に守ることが神に対する真実なる愛を表すことになると考えたのです。安息日は金曜日の日没から土曜日の日没までの間は、調理もしてはならないと考えられ、ユダヤ人は厳密に安息日にしてはならないことを守って生活していました。

ですから、ユダヤ人であるか否かは安息日の行動でわかるのです。しかし、イエスの教えは安息日に対して非常に急進的です。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」（マルコ福音書２章２７節）というイエスの言葉は、当時のユダヤ人の意識からするならば、画期的な考え方です。

イエスは安息日にユダヤ教の会堂に集まるユダヤ人に対して教えられましたが、本日の聖書個所でもイエスはユダヤ人の会堂で教えられていました。そこに、１８年間も病いのために、腰が曲がったままでいる女性がいたのですが、その女性の上に手を置いて治したのでした。ところが、会堂長は安息日に治療という労働を下ことに腹を立てて、居合わせた人々に行ったのです。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない」。

この発言は当時のユダヤ教の安息日の解釈から見れば正当なものです。そこでイエスは安息日でも行っていることを皮肉って言うのです。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いていくではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか」（１５～１６節）。この言葉に、最初安息日に治療行為をしたイエスに不快感を持った人々は恥じ入ったのでした。

既にイエスは安息日について、「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」（ルカ６章９節）と問題提起をして、安息日に善を行うこと、命を救う行為をすることの正当性を表明しています。たとえ安息日であっても、人に対して善い行いをすることや命を救うことを選択する生き方を優先すべきだという根本的な提案がなされているのです。

先週、新宿の映画館で「アウシュヴィッツの生還者」を見てきました。当初１７日の木曜日に終了する予定だったので、前日に慌てて見に行ったのですが、「レインマン」の監督が作成した作品だったので、予想通り考えさせられる内容でした。家族に、「見た方がいいよ」と言ったのですが、後から調べると、２４日まで延期されて上映されることになっていました。

舞台は戦後のアメリカで「ポーランドが誇る、アウシュヴィッツの生還者」を宣伝文句

にボクサーとして活躍していたハリーと言う人物の物語です。ハリーは最初こそ勝ち続けていたのですが、途中から負けが込んできたボクサーです。彼は負けが込んで来て、プロモーターが有名な選手との試合を敬遠する中、どうしても新聞を飾る有名選手になりたくて、無理やり、有名選手との試合を組みます。

なぜ、ハリーが有名選手との試合に固執するのか。それは、ハリーがナチスドイツのユダヤ人狩りで生き別れになった初恋の相手レアを探し出すためだったのです。そのために、新聞を飾る有名な選手になって探し出そうとしていたのでした。どうしてハリーがボクシング選手になっていたかと言うと、彼がアウシュヴィッツに収容されていた際に、ナチスの中尉が主催する賭けボクシングの選手として、同胞のユダヤ人と戦わされていた過去があったのです。ドイツ人将校の中尉は、収容所でユダヤ人同士を戦わせて賭け事をしていたのですが、真剣に戦わせるために、敗者はそのリング上で銃殺していたのです。ハリーは、恋人のレアと再び会うために、この非情なボクシングの試合を勝ち続けてアウシュヴィッツから生還した人物なのです。

けれども、その事実は公表していません。ハリーは自分のことを深く理解しようとしている妻にも、その事実は話せていないのです。夜ポーランド語でうなされている父親の姿に恐ろしさを感じる息子にも、もちろん話していません。後に、息子に自分のアウシュヴィッツでの理不尽な体験を語るのですが、この映画の原作は、その息子が、父親が実際に経験した過去の事実をまとめたものが土台となっているのです。

ハリーが恋人に会いたいがために、同胞のユダヤ人と戦い、勝利を収めていく中で、愛する人に会いたいがために自分を野獣にしていったのですが、そこにはハリー自身の精神を蝕んでいく救いのない、非情な人生の選択があったのです。ハリーにとって、生き抜くことを選択させていったものは、愛する人と再会する望みが原動力になっていたのですが、それと引き換えに戦後はボクサーとして生きながら自分自身を失っていったのでした。

イエスが「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」というのは、人間の命を生かすことに神の御旨があることを言い表したものです。８月１５日を迎えるたびに、いつも思わされることは、８月１５日を終戦記念日と言い表す習慣があることです。マスコミも何の疑いもなく終戦記念日と言います。けれども、終戦という表現が昭和天皇の意志によって戦争を終わらせることができたということを言外に言い表していることに違和感を覚えます。

戦争から辛うじて復員できた人の中に、実に多くのＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）になった人たちがいます。ＰＴＳＤによって抜け殻になった父親の記事が８月１５日の朝日新聞朝刊１面に掲載されていましたが、戦争体験は本人だけでなく、子供、孫まで苦しみが連鎖することがわかっています。１０年ほど前にポーランドにあるアウシュヴィッツに行って、いろいろな事柄を知りましたが、アウシュヴィッツにはいまだに戦争がいかに人間の尊厳を失わせるかという事実が埋もれていることを改めて映画で知らされました。イエスが安息日の規定概念を、人間の尊厳を守るという視点で見極めていたことを思わされます。８月１５日が敗戦を覚える日として、戦争を美化することなく、このところ復権しつつある国粋思想からの解放を記念する日にしたいものです。